國學院大學文学部 ガイドブック

史学科

君と探したい歴史がある

KOKUGAKUIN Univ.

國學院大學

もっと日本を。もっと世界へ。

國學院大學史学科って、こんなところ！

ー「歴史」から「歴史学」へのステップアップー

史学科代表
樋口　秀実 教授
（外国史学コース）

皆さん、「歴史」と「歴史学」とは、どう違うと思いますか？　皆さんが中学や高校で学んできた「歴史」と、史学科という名前からわかるように、大学でこれから学ぼうとする「歴史学」とは、何が異なるのでしょうか？

皆さんがすでに体験してきたように、高校までに学んできた「歴史」は、教科書の知識を暗記することが中心でした。一方、大学での「歴史学」では、想像力や推理力が求められます。邪馬台国はどこにあるのか、本能寺の変の動機は何か、無謀とも思われる太平洋戦争に日本はなぜ突入したのか。皆さんも、知識としては持っているけれど、きちんとは答えが出せない歴史上のそうした疑問を、一度は抱いたことがあるでしょう。これらの疑問に対して答えを見つけ出していくことが「歴史学」の醍醐味です。だから、大学での「歴史学」は、教科書に書かれてあることよりも、教科書に書かれていないことを探求していきます。そこでは、皆さんの豊かで、自由な発想こそが、いちばん大事になります。

とはいえ、「歴史学」も経済学や物理学と同じように科学の一種ですから、突飛な発想、自分勝手な思い込みだけではいけません。そうした発想をきちんとした形にして社会に発信するためには、客観的な裏付け、つまり証拠が必要です。「歴史学」において、こうした証拠になるのが、史資料です。ここでいう史料とは過去の文字記録、もう一方の資料は非文字系の遺物です。考古学上の遺跡や古地図・肖像画などが、後者の資料にあたります。すなわち、大学の「歴史学」では、高校までに学んできた「歴史」上の基礎知識を踏まえたうえで、自分なりの疑問を見つけ出し、それを解明するための史資料にできるだけたくさん接して、客観的証拠をもとに答えを導き出していくことがとても大切になります。

後のページで詳しく紹介するように、史学科では、答えを導き出すための技術や史資料の性格に応じて、４つのコースに分かれています。日本史学コースでは和様漢文や崩し字、外国史学コースでは英語や漢文といった文字記録を読解しなければなりません。一方、考古学コースでは、遺跡発掘を体験し、そこで得られた遺物から過去の人間社会を正確に復元することが必要です。地域文化と景観コースでも、絵図や古地図や浮世絵から情報を読み取ったり、伝統行事や言い伝えを調査・分析したりする手法が求められます。これらは、高校までの「歴史」の授業内で勉強しないことばかりです。國學院大學史学科では、このように色々なコースが充実し、一口に「歴史学」といっても、学ぶうえでの選択肢がたくさんあることが、大きな特色になっています。

史学科での学びの総仕上げとなるのが、４年次に提出する卒業論文です。それは、自分でたてた問いに対し、収集した史資料を読解して答えを発見し、それを読み手にわかるように理路整然とした文章で書かなければいけないものです。実は、史学科の卒業生の約８割は、歴史とはあまり関係のない一般企業や公務員に就職します。とはいえ、みずから問題意識をもち、必要な情報を収集して分析し、分かりやすい言葉を使ってプレゼンテーションするというスキルは、卒業後もきっといかされるはずです。「歴史学」を探求するための能力は、ビジネスで必要とされる能力と何ら変わりはありません。史学科は、歴史好きが多く、志向性の高い学生が集まっています。皆さんの「好き」を突きつめながら伸び伸びと勉強し、これから社会で生きていくための能力を身に着けること。それこそが、この史学科において、皆さんに期待していることなのです。

史学科の学びとその特色

学ぶ分野を明確にした４コースと学ぶ目的で選べる２つのプログラム
全方位的に歴史を学べる充実したカリキュラム！

４つのコースと２つのプログラム

Q. コースとその内容について教えてください。

A. 史学科には「日本史学コース」「外国史学コース」「考古学コース」「地域文化と景観コース」の４つのコースがあります。「日本史学コース」では、古代から近現代までの各時代の史実とその意義について研究します。「外国史学コース」では、朝鮮半島から北アフリカまでの各地域とヨーロッパからアメリカまでの各地域の歴史を、語学の修得などを基礎として明らかにしていきます。「考古学コース」では、遺跡や出土遺物などの物質資料から過去の人類文化とその歴史を読み解きます。「地域文化と景観コース」では、絵図や古地図、地名や景観、地域の信仰や芸能など、風土と歴史のなかで培われた文化を多方面から究明します。コースの選択は、２年次の初めに行います。

Q. “プログラム”について教えてください。

A. ４つのコースとは別に、史学科には２つのプログラムがあります。S－プログラムと P－プログラムです。大学にはさまざまな目的で多くの学生が入学してきます。どのような職業に就きたいかなどの多様な学びの要求に対応するため、２つのプログラムが存在します。プログラムの選択は、２年次の初めに行います。

Q. S－プログラムとは何ですか？

A. S－プログラムとはStandard Career Programの略称です。歴史を幅広く学んで人生に活かし、将来は公務員や一般企業への就職を考えている学生のためのプログラムです。歴史学の専門科目の他に、語学や法学・経済学など社会人の素養となる科目を多く履修します。教員免許・学芸員資格の修得は可能です。

Q. P－プログラムとは何ですか？

A. P－プログラムとはProfessional Career Programの略称です。歴史学の必修科目や選択必修科目から多く履修し、将来教員や学芸員などの専門職、大学院への進学を考えている学生のためのプログラムです。そのため教員免許や学芸員資格の修得を勧めます。

Q. 史学科の教員について教えてください。

A. 史学科には現在、20名の専任教員がいます。日本史学コース８名、外国史学コース４名、考古学コース２名、地域文化と景観コース２名の構成です。博物館学課程を担当する教員２名、教職課程を担当する教員２名も史学科に所属しています。多彩な専攻分野の教員から専門性の高い教育・指導を受けることができます。専任教員のほかに、例年90名前後の兼任講師がさまざまな授業を受け持っており、非常に幅広い選択肢の中からいろいろな歴史の授業を受けることができます。

Q. どのような授業がおこなわれていますか?

A. 史学科では90以上の専門科目を開講しています。開講講座数は280以上にも及び、全国の大学の中でも最も充実した内容といえるでしょう。それらは授業の形式からみると「講義科目」「演習科目」「実習科目」に分けられます。「講義科目」は教員がさまざまなテーマに即して自身の見解を学生に講義する形式の授業で、歴史研究の最前線が学べます。一方「演習科目」は史料や論文を学生が調べてきて、それを発表するゼミ形式の授業で、20名前後の少人数でおこないます。演習では学生の自主性・主体性が大切になります。「実習科目」は考古学コースと地域文化と景観コースに設けられており、フィールド調査を通して実践的に学ぶ授業です。このほかに「卒業論文」があります。

Q. 大学の授業の取り方について教えてください。

A. 大学の授業は１コマ90分です。前期または後期の半期開講の科目と、通年開講の科目があり、それぞれ履修単位（半期は１～２単位、通年は４単位）が異なります。國學院大學のカリキュラムは、大きく「共通教育科目」と「専門教育科目」からなっています。卒業するためには最低124単位の単位取得が必要で、共通教育科目を少なくとも36単位以上（第二外国語も含む）、専門教育科目を少なくとも64単位以上履修しなくてはなりません。残りの24単位は、史学科の専門科目から選んでもよいし、すべての学部・学科から提供された「全学オープン科目」の中から取ることもできます。自分自身の関心や目的、キャリアデザインに合わせて、授業の取り方も自分で決められます。

卒業条件

- 専門教育科目 64単位以上
- 全学オープン科目 24単位
- 共通教育科目 36単位以上

歴史学を広く深く学びたい人

史学科の専門教育科目88単位、共通教育科目36単位を取って卒業することができます。教職の資格取得に有利な取り方もできます。

卒業に必要な単位：124 単位以上

- 共通教育科目 36単位以上
- 史学科専門科目・卒業論文 88単位以上

歴史だけでなく幅広くいろいろ学びたい人

専門教育科目64単位と共通教育科目36単位のほかに、全学オープン科目を活用して他学部・他学科の専門科目から好きな授業を取ればよいでしょう。知的好奇心を満たす副専攻プログラムもあります。

卒業に必要な単位：124 単位以上

- 共通教育科目 36単位以上
- 全学オープン科目 24単位以上
- 史学科専門科目・卒業論文 64単位以上

（共通教育科目＋他学部・他学科専門科目）

Q. 4年間の学びについて教えてください。

A. 史学科のカリキュラムは、最初の導入教育から総仕上げの卒業論文まで、段階的に専門性を深めて進むように設計されています。ここでは必修科目を中心に説明します。

1年次	各コースの教員が歴史をみる眼差し(歴史の見方)や研究の取り組み方法(研究姿勢)などについてリレー式に講義する「史学入門Ⅰ・Ⅱ」、史・資料の探し方、レポートの書き方、発表の仕方などの初歩的な手法を学ぶ「史学導入演習Ⅰ」、専門研究のための基礎を学ぶ「史学導入演習Ⅱ」などを履修します。歴史学のさまざまな分野、それぞれの研究方法について学びます。
2年次	必修科目として「史学基礎演習Ⅰ」と「史学基礎演習Ⅱ」を履修します。自らが専攻しようとする分野を中心に、史・資料を読み解くための技術や語学力を身につけるための実践的な訓練と発表をおこなっていきます。
3年次	卒業論文指導を希望する教員が担当する「史学展開演習Ⅰ・Ⅱ」を履修し、演習発表や卒業論文の準備報告を通して、より専門的に歴史研究を学んでいきます。卒業論文の指導が始まり、自分の研究テーマや研究計画を立て、10月には一次題目を提出します。
4年次	指導教員の「史学応用演習Ⅰ・Ⅱ」で、卒業論文の中間発表などをおこない、史学科での学びの集大成に向けて進みます。７月には卒業論文の二次題目を提出し、12月までに完成させて提出します。

Q. S-プログラムとP-プログラムの専門科目の取り方について教えてください。

A. 専門科目には、基幹科目・コース別基幹科目・総合科目・展開科目・関連科目の５種類があります。両プログラムとも卒業論文を含む必修科目である基幹科目の28単位を履修する必要があります。コース別基幹科目については、S-プログラムでは各コースからそれぞれ６単位ずつを含む８単位以上、P-プログラムでは単一コースからの12単位を含む16単位以上を履修します。総合科目からは、各コース８単位以上を履修します。展開科目・関連科目については、S-プログラムでは展開科目・関連科目から合計20単位以上を履修し、P-プログラムでは展開科目・関連科目から合計12単位以上を履修します。関連科目には社会人の素養となる科目や、教員免許修得のための選択科目などが多くありますので、自分の志望に合わせて選択することができます。

Q. どのような資格が取得できますか？

A. 所定の科目を履修して単位を取得することにより、次の資格を取得することができます。ただし、各免許・資格とも所定の課程費の納入が必要です。

- 教職免許(中学校一種「社会」、高等学校一種「地理歴史」、高等学校一種「公民」)
- 学芸員
- 図書館司書・学校図書館司書教諭
- 考古調査士資格(２級)

Q. 卒業生の進路や就職状況は？

A. 経済学などの実学に比べて史学専攻は就職に不利といわれることがありますが、卒業生の就職状況は実学系の学部と大きく変わらず、さまざまな職種の一般企業に就職する人が最も多くなっています。史料やデータの収集力・分析力、それに基づく客観的な判断、歴史的思考の力は、さまざまな職種に活かされる重要な資質になるでしょう。教員や学芸員を目指して資格を取得する人の割合が高く、さらに大学院に進学して専門職や研究職を目指す人が比較的多いのも、史学科の傾向となっています。

日本史学コース

史料にあたり、史実を考える
日本の歴史に新しい１ページを加える

概要

古代から現代にいたる
我々の生きてきた道を「実証史学」で学び、
これからに活かす

日本史学コースでは、日本史を大きく古代・中世・近世・近現代の４つに区分し、それぞれ２人の専任教員が担当しています。國學院大學史学科の伝統である「実証史学」、すなわち厳密な史料批判（古文書・古記録など諸史料の内容を検討すること）を基礎に、各時代・分野の史実やその意義を研究します。

日本の社会・文化の成り立ちを明らかにして、現代社会とのつながりを考え、これから訪れる未来をひらく。

まさに時間を超えた四次元の「歴史的瞬間」を研究の材料として、論理的思考力や情報分析能力を高め、世界で活躍できる人材を育てていきたいと考えています。

主な授業

史料講読Ⅰ・Ⅱ

- 山崎雅稔准教授
- 田中大喜兼任講師
- 高見澤美紀兼任講師
- 内山京子兼任講師

歴史研究を進めるためには、歴史資料（史料）を正確に理解するための読解力が不可欠です。漢文調の文章や草書体（いわゆるくずし字）で書かれた史料を読む力が必要となるのはもちろんですが、史料の様式・形式、作成された背景など、その性格を詳しく知る必要もあります。日本古代史・中世史・近世史・近現代史の時代ごとに開かれるこの講義では、それぞれの時代の史料の特徴を学びながら、参加者全員で史料を読解していくことで、史料の読解力を養います。

有職故実Ⅰ・Ⅱ

- 中込律子兼任講師

厳格な身分制が確立されていた前近代の日本社会を理解するために、とても有効な学問が「有職故実」です。有職故実とは、公家社会や武家社会に属する者たちが日常的に必要とした知識の総称で、儀式・儀礼、服装、道具、政務の遂行や文書の形式など、実に多様な内容を含みます。Ⅰでは天皇や貴族の衣・食・住について、Ⅱでは朝廷の年中行事や儀式、出産から葬送に至る通過儀礼などを扱っています。

史料管理・保存論Ⅰ・Ⅱ

- 岩橋清美教授

國學院大學が所蔵している江戸時代の古文書の原本等を使用して授業を行ないます。江戸時代は大量の古文書が作成された時代で、この分析なしに研究は難しいのですが、その読解は困難です。この授業で少しでも近世古文書に関する知見を深めて、江戸時代の研究に役立ててほしいと思います。

史学専門講義

- 山崎雅稔准教授

歴史認識をめぐって政治的対立が続く日本と韓国。その傍で歴史家は過去を乗り越えるための対話を続けてきました。講義では、自身が携わってきた対話の試みをふまえて、韓国の前方後円墳、倭寇、豊臣秀吉の朝鮮出兵、通信使、日韓併合、歴史問題、韓流といったテーマを取り上げながら、歴史対話の可能性を探ります。

教員紹介

	氏　名	専門分野／主な研究テーマ		氏　名	専門分野／主な研究テーマ
教　授	**佐藤 長門** Sato Nagato	日本古代史／古代王権・旧家の権力構造論	教　授	**吉岡　孝** Yoshioka Takashi	日本近世史／江戸幕府論・幕末史・地域社会史
准教授	**山﨑 雅稔** Yamasaki Masatoshi	日本古代史／朝鮮古代史／日韓関係史・東アジア交流史	教　授	**岩橋 清美** Iwahashi Kiyomi	日本近世史／社会経済史・文化史・地域史
教　授	**髙橋 秀樹** Takahashi Hideki	日本中世史／院政～鎌倉期の政治史・社会史・家族史、史料論	准教授	**柴田 紳一** Shibata Shinichi	日本近現代史／日本近・現代の政治史・軍事史
教　授	**矢部 健太郎** Yabe Kentaro	日本中世史／室町・戦国・織豊期の政治史・制度史・公武関係史	准教授	**手塚 雄太** Tezuka Yuta	日本近現代史／日本近現代の政治史・地域史

教員からのメッセージ

大学の４年間にこそできる、気力・体力も培う研究

矢部 健太郎 教授

私は、國學院大學の学生時代、剣道部に所属していました。日々の厳しい稽古に励みながら、専門の日本史学に加えて教職課程や博物館学芸員課程も選択していたため、とても慌ただしい毎日でした。しかし、あの苦しい日々は、いまの自分の支えとなっています。研究の時間をすべて剣道に充てていれば、もう少し強い剣士になれたかも知れない。しかし、剣道の時間をすべて研究に充てていたとして、もっとマシな研究ができていたかと言えば、そうは思いません。剣道で培った気力・体力は、私が研究する上で不可欠なものだからです。ですから、今も剣道を続けています。何かに取り組もうとする時、大事なのは「集中力」ではないでしょうか。人は誰も平等に、１日は24時間しか与えられていない。その時間をいかに有効に使えるか。

大学の４年間は、子ども（高校生）から大人（社会人）へ成長するための大切な時間でもあります。学問を大切にしながらも、学問以外にもさまざまな経験を積み、充実した学生生活にしてください。

外国史学コース

重なりあう、いくつもの歴史を縦横無尽に行き来する…わくわくが深さを増していく

概要

歴史が長く、地域も広大。語学力をつけながら、強い問題意識をもとう

外国史学コースは、大きく分けて、東洋史を学ぶコースと西洋史を学ぶコースとの２つがあります。前者はさらに、中国や朝鮮などの「漢字文化圏」の歴史を研究するものと、東南アジア・インド・中東などの「横文字文化圏」の歴史を研究するものとに分かれます。一方、後者は、一口に「西洋」といっても関心のある地域はどこなのか、いつごろの時代を勉強したいのかにより、さまざまな研究方法があります。

いずれにせよ、外国史学コースが対象とする地域は非常に広大で、時間の幅は長く、そこに居住する民族は星の数ほどおり、宗教も言語も複雑にからみ合っています。その歴史のすべてを４年間で学ぶのは、残念ながら、不可能です。外国史を学ぼうという皆さんに期待するのは、何を勉強したいのか強い問題意識を持ち、自主的に行動し、授業に積極的に参加することです。また、外国史を研究する上では、語学力は必須です。国際社会で活躍する人材が生まれてくれることを期待しています。

主な授業

西洋地域史・史学専門講義（西洋史）

西洋史は対象とする時代と地域が広いので、実に多様なテーマの講義が開講されています。たとえば、古代エジプト史、近世・近現代ヨーロッパの魔術・魔女論、近現代フランスの宗教と社会、ヨーロッパの建築史、近現代中東欧の民族問題、ナチズム論などです。学生のみなさんは自身の興味と関心に応じてこれらの科目を自由に履修することができます。

西洋地域史Ⅲ

● 神長英輔教授

20世紀のロシアおよびその周辺地域（ロシア帝国・ソ連・ロシア連邦）の歴史を概観する講義です。ロシア革命の特徴、社会主義国家ソ連の政治・経済システム、各時代の国際関係、二度の世界大戦がロシアに及ぼした影響、ソ連解体の原因などを学び、ロシア・中東欧・中央ユーラシア近現代史研究の基礎となる知識を身につけることが授業の目標です。

東洋地域史Ⅲ

● 樋口秀実教授

近代の日中関係と中国人のなかの対日協力者（「漢奸」と呼ばれる。漢奸は売国奴、裏切り者の意。代表例として浦儀や江兆銘）の動向とを検討することで、近代日本＝加害者、近代中国＝被害者という一面的な歴史の見方を修正し、東アジア全体の政治的変動のなかで日中関係史を見直していこうという授業です。

史学専門講義

● 石丸由美兼任講師

オスマン帝国のバルカン半島に対する支配のあり方をみることで、オスマン帝国の多様性を理解し、「オスマン帝国史＝トルコ史」「東洋史のなかのオスマン帝国史」という誤った歴史認識を訂正しようという授業です。

教員紹介

	氏　名	専門分野／主な研究テーマ
教　授	**大久保 桂子** Okubo Keiko	西洋近世史・近代史（イギリス近世史）／18世紀イギリスの政治史イギリスの「財政＝軍事国家」論、近世ヨーロッパにおける国家形成と「軍事革命」論、近代イギリスの女性史
教　授	**神長 英輔** Kaminaga Eisuke	ロシア近現代史、東北アジア近現代史／ロシア極東近現代史、日露交流・関係史
准教授	**江川 式部** Egawa Shikibu	中国古代〜中世史／中国の祭祀儀礼制度史、礼・法関係史
教　授	**樋口 秀実** Higuchi Hidemi	東アジア国際政治史／近代日中関係史、清末・中華民国時代の中国政治史

教員からのメッセージ

外国史に語学力は必須。でも、歴史とは一筋縄ではいかないものだと終わりのない深い「学び」もわかっていくでしょう

大久保 桂子 教授

外国史を専攻すれば、外国の昔のことなら何でもできる、そう思っていませんか？史学科へ行けば、あなたの好きな歴史上の人物を調べ、その人物の伝記を書くことができる、そう思っていませんか？いいえ、そうはいきません。高校の世界史の教科書に書かれている出来事や、歴史映画やドラマで描かれている人物と、大学で学ぶ外国史とでは、別世界といえるほどの違いがあります。史学科は歴史を研究するところですから、研究に値することを研究していただきたい、と学生さんにはいつもお願いしています。

では、研究に値することとは何でしょうか。どうすれば、研究に値する主題とそうでない主題を区別できるのでしょうか。その心得を史学科で学んでください。たいていの学生は、２年生が終わるまでには、わかるようになります。そして、思っていたより歴史は奥が深い、ああ、語学ができるようにならなくちゃ、と思うようになります。外国史を学んで、歴史とは一筋縄ではいかないものだな、学ぶことには終わりがないな、と卒業するときに思っていただければ、私は本望です。

考古学コース

地下に埋もれた遺跡は、何を伝えようとしているのか その背景には、どんなドラマがあったのか

概要

考古資料の見方や遺跡の発掘調査法を実践的に学び、モノによる歴史学の視座と方法を身につける

考古学とは、地下に埋もれたさまざまな遺跡や遺物をもとに過去の人類文化と歴史を読み解いていく学問です。史料に基づく文献史学とは取り扱う資料が違うため、方法論や研究法も異なります。過去の人間生活や文化をその時代のモノから実証的に研究できるのが考古学の魅力であり、文字のない先史時代はもちろん歴史時代の事柄も広く研究対象になります。考古資料の見方や遺跡の発掘調査法、研究方法などの知識・技術を実践的に学び、モノによる歴史学の視座と方法を身につけることが考古学コースの目標です。また遺跡の保護・継承・活用はこれからの地域づくりと文化の豊かな創造にとって大切であり、そのような人材の育成にも力を入れています。

主な授業

考古学調査法Ⅰ・Ⅱ／考古学実習Ⅰ・Ⅱ

- 谷口康浩教授
- 青木敬教授

夏季休暇期間中におこなう遺跡の発掘調査に参加して、考古学調査の基礎知識とさまざまな技術を実習する授業です。前期には測量器材の使い方や調査対象遺跡について勉強し、発掘の計画と準備を進めます。後期には出土した遺物や記録を整理し、発掘調査報告書をまとめます。本格的な写真撮影やパソコンを使った文書・画像の制作なども伝授します。現在取り組んでいるのは、長野県穂高古墳群（古墳時代）と群馬県居家以岩陰遺跡（縄文時代・弥生時代）の発掘調査です。

考古学各論Ⅰ～Ⅷ

- 青木敬教授
- 大工原豊兼任講師
- 中村耕作兼任講師
- 寺前直人兼任講師
- 古谷毅兼任講師
- 水本和美兼任講師

日本考古学の最前線の研究成果や論点について、縄文時代（Ⅰ・Ⅱ）・弥生時代（Ⅲ・Ⅳ）・古墳時代（Ⅴ・Ⅵ）・近世（Ⅶ・Ⅷ）の時代別に詳しく講義する授業です。歴史の流れや文化の変遷を長い時間のスケールで考えられるのが考古学の特長です。これらの各論を通して履修すれば、狩猟採集から農耕社会へ、さらに国家が形成される時期から、江戸時代の社会と文化までの長いプロセスを知ることができるでしょう。

文化財行政論

- 佐藤雅一兼任講師

文化財行政が取り組む文化財の保護と活用は、近年その重要性がますます高まってきています。文化財保護の歩みを戦前からたどり、文化財保護法における文化財保護の制度と枠組みを読み解きつつ、豊富な実例をもとに文化財の保護と活用について考えていく授業です。卒業後、文化財行政に携わる専門職に就職することを希望する学生には大いに参考となる内容です。

教員紹介

	氏　名	専門分野／主な研究テーマ
教　授	**谷口 康浩** Taniguchi Yasuhiro	先史考古学／縄文時代の考古学、縄文文化の起源の探求
教　授	**青木 敬** Aoki Takashi	歴史考古学／古墳時代の考古学、東アジアの都城と墳墓・寺院
助　手	**松本 耕作** Matsumoto Kousaku	先史考古学／縄文時代の考古学

教員からのメッセージ

充実の資料と蔵書、そして授業。
チームワークの大切さを学ぶ遺跡発掘調査。
本気な「考古学」が待っている。

谷口 康浩 教授

考古学コースの特色ある授業の一つに「考古学調査法」があります。毎年夏に行う遺跡発掘調査の実習であり、30年以上も前から続く伝統の授業です。遺跡の発掘を実際に体験し、出土資料の整理から報告書作成までを実習生たちが主体的に行う中で、考古学のモノの見方や考え方、遺跡発掘の方法を実践的に学びます。寝食を共にしながらの10日余りの発掘で実習生は大体へとへとになります。その後の整理作業も長く根気の要る課題であり、思うようにはかどらない報告書作成に誰もが思い悩みます。普通の授業では味わえないさまざまな経験を通して考古学を深く理解すると同時に、本当の仲間をつくりチームワークの大切さを学んでいくのです。ここから巣立った卒業生の中には、埋蔵文化財関連の専門職に進んだ人も少なくありません。考古学関係の授業は、この実習を合め毎年50講座近くが開講されています。学内には全国有数の考古学関係の蔵書や考古学資料館もあります。國學院の史学科で「考古学」を本気で学んでみませんか。

Kokugakuin University Department of History

Topics

本格的な発掘調査をとおして学べることは何か。

考古学調査法Ⅰ・Ⅱ　考古学実習Ⅰ・Ⅱ

群馬県吾妻郡長野原町居家以岩陰遺跡

縄文早期・約8300年前の埋葬人骨（成人女性）

縄文学のパイオニア、小林達雄名誉教授を現地指導にお迎えする

最新の測量技術で一つ一つ遺物の出土位置を記録する

考古学的な調査・研究の根幹となるのは、遺跡の発掘調査と発掘調査報告書の作成です。発掘調査とは、研究目的のために仮設を立て、発掘によってそれを検証する作業です。そして、発掘の結果あきらかになったデータを公にする必要がありますが、そのために発掘調査報告書という書籍を作成し、公開することが求められます。こうした発掘調査から発掘調査報告書の作成にいたる一連の調査方法を学ぶのが、ここで紹介する考古学調査法Ⅰ・Ⅱと考古学実習Ⅰ・Ⅱの各授業です。

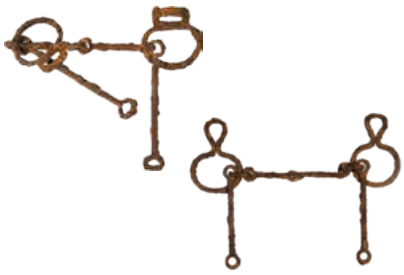
考古学実習で現在調査の対象とする遺跡は２ヶ所です。

まず、先史考古学分野として縄文時代早期の岩陰遺跡である群馬県吾妻郡長野原町居家以岩陰遺跡（谷口康浩教授担当）です。もうひとつが、歴史考古学分野として古墳時代後期の群集墳（同時多発的に古墳がつくられて群集したもの）である長野県安曇野市穂高古墳群Ｆ９号墳（青木敬教授担当）です。いずれの遺跡も毎年夏季休暇に現地に出かけ、発掘調査を実施しています。

居家以岩陰遺跡では、埋葬人骨が20個体以上出土しているほか、岩陰前の灰層から土器や石器、動植物の遺存体が出土するなど、縄文時代の社会や精神文化、縄文人の起源・系統がうかがえる貴重なデータが得られています。

いっぽうの穂高古墳群は、長野県下有数の群集墳で、このうち2009年からＦ９号墳を調査しています。石室から土器・武器・馬具・装身具などが数多く出土し、遺物からＦ９号墳は６世紀末頃につくられ、11世紀にいたるまで繰り返し利用された古墳であることがあきらかとなってきました。

長野県安曇野市穂高古墳群F９号墳



出土した馬具の一部（轡）

石室内からみつかった武器類と土器

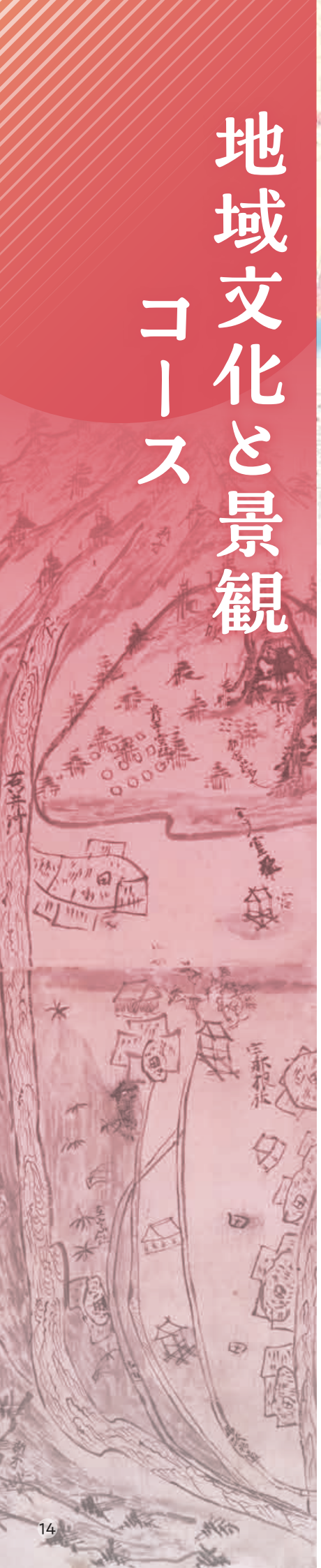
現地説明会には大勢の人が来跡する

Ｆ９号墳の横穴式石室。内部から多数の遺物が出土した

考古学調査法Ⅰでは、発掘調査に必要な技術の習得と、対象とする遺跡とその時代の先行研究を学び、来るべき発掘調査に備えます。夏季休暇中に実施する考古学実習Ⅰ・Ⅱは、現地で発掘調査に参加し、掘削や検出、遺構・遺物の記録を作成など、学生が意見を出し合いながら調査を進めていきます。期間は10日程度、同じ宿舎で寝食を共にしながら、発掘調査は朝から夕方、時には夜までおよぶことも少なくありません。宿舎に戻ってからも、夕食後に出土した遺物や作成した記録類の整理に追われ、期間中はまさに「発掘調査一色」の日々を過ごします。後期の考古学調査法Ⅱでは、発掘調査報告書を刊行するための各種の作業にとりくみます。

発掘調査報告書に必要な図面や写真図版を作成し、文章の執筆から編集まで一貫して学生自らが主体的にかかわる例は、全国的にみても非常に珍しく、國學院大學の考古学コースを特徴づける教育のひとつです。毎年、「遺跡調査を経験してみたい」と志願して、考古学調査法Ⅰ・Ⅱや考古学実習Ⅰ・Ⅱを履修する考古学コース以外の学生も数多くいます。発掘調査・研究を職業にしたいと考えている学生はもちろんのこと、本当の仲間ができること、みんなでひとつの目的を達成すること、相手へ十分に意図が伝わるような日本語の文章を書くことなど、その後のキャリア形成にも重要な要素が詰まった考古学調査法と考古学実習の授業は有益な経験になるはずです。もちろん発掘調査報告書の作成まで、決して楽な道のりではありませんが、濃密でここでしか味わえない経験ができるでしょう。

地域文化と景観コース



仲間と古地図を手に山中の古道を歩く。麓に街並みが見えたとき、なぜかほっとした。風景のなかに、歴史の息づかいを感じた日

概要

古地図・絵図を持って歴史を歩く
地域がつくってきた文化・景観を読み解き、次世代へ

人々のくらしは、風土と歴史に培われた「地域」のなかで営まれてきました。そこには風土に適合したくらしを維持してゆくための「文化的景観」が造りあげられ、さまざまな生活文化が育まれてきました。過去から現代に継承されてきたこれら「地域」の生活文化について、文字史料だけでなく、地名や景観、古地図・絵図、建築・石造物などの文化財や伝統芸能など、「地域」に根ざしたさまざまな歴史遺産の調査を通じて、その固有の価値を解明し、これらを次世代に継承してゆくための実践に取り組みます。

古地図・絵図に描かれた伝統的景観を復原する歴史地理学的な手法を基礎として、フィールド・ワークや各種の文化財・歴史遺産の調査を通じて、環境と生業活動との関わりや、地域に生きた人々の社会生活の諸相に迫るとき、一度失われると再生が困難な生態系や過去の生活文化の貴重さを体得することができるでしょう。

主な授業

地域文化と景観概論Ⅱ
- 川名禎准教授

この授業では、日本地域や景観に残された歴史を探りながら、近世以降を対象とした歴史地理学研究を概観します。①近世における日本の地域（日本の東西、三都と藩領など）、②近世都市の景観と機能（城下町、宿場町、門前町など）、③近世・近代の村落景観（農山漁村、新田集落・開拓村）と交通（水運と鉄道）、などのテーマを通じて地域や景観の捉え方や見方を学び、歴史地理学的なものの考え方を習得します。

地域文化各論Ⅰ
- 湯澤規子兼任講師

日本各地の伝統的「地域産業」と、それを支える人びとの「くらし」の歴史的特徴、地域的特徴を具体的に考える授業です。「くらし」とは、衣食住の世界というだけでなく、日々の営みである生産と生活のトータルな姿を意味します。①日本の農山漁村と女性たち、②ライフヒストリーからみた伝統織物業と地域、③近代日本の織物と農村、④ぶどうとワイン、甘夏と海の地域史を事例として考えます。

絵図古地図研究
- 三河雅弘兼任講師

古今東西の絵図や古地図には、文字史料では伝達できないさまざまな情報が、グラフィックに表現されています。そこには、過去の景観や場所に関する個別具体的な情報にとどまらず、過去の社会が共有していた地域や国土・世界のイメージが埋め込まれています。こうした情報を読み取るためには、絵図や古地図の表現のルールを正しく理解する必要があります。この講義では、多数の事例を用いて、絵図・古地図読解の方法をわかりやすく講述します。

地域・景観調査法
- 吉田敏弘教授

地域・景観調査の基礎となる絵図・古地図や各種の地図・空中写真類に関する知識を深め、写真画像やデジタルマップのPC処理法の習得をめざします。後者で用いる地理情報システム（GIS）処理の習得は、学生の就職にとって利点となるスキルです。また、フィールドワーク実習をかねて、年2回の伝統的農作業体験（岩手県一関市）を実施し、伝統的農村景観をつぶさに観察すると共に、地域住民との交流を通じて、保全のための実践に取り組みます。

教員紹介

	氏　名	専門分野／主な研究テーマ
教　授	**吉田 敏弘** Yoshida Toshihiro	歴史地理学、地図史／日欧の中世農村論、荘園絵図・寺社絵図をはじめとする中世絵図研究
准教授	**川名 禎** Kawana Tadashi	歴史地理学／近世都市空間の研究

教員からのメッセージ

今、君が見ている「景観」は どう作られてきたのか。 歴史軸からフィールドで、文化を掘り起こそう。

吉田 敏弘 教授

近年大きな話題となっているユネスコ世界文化遺産のなかには「文化的景観」というカテゴリーがあり、既に世界各地の価値ある景観が文化遺産に登録されてきましたが、国内でもおよそ十年前から文化庁は保護すべき文化財として「重要文化的景観」の選定を進めています。自然環境と歴史＝地域文化が一体となった歴史遺産として、「文化的景観」にはかけがえのない価値が認められるようになりました。全国の棚田の保全が叫ばれてきたのも、こうした文化的景観保全の一環です。

2013年度より史学科の新たなコースとして、「地域文化と景観」がスタートしました。文献史料以外のさまざまな歴史資料に光をあて、現在に生きる歴史遺産＝地域文化の深い追求をめざすその大きな柱が「景観」です。いまや「景観」は地域活性化の重要な資源としても、その価値の再発見が期待されています。また、景観それ自体や古地図・絵図から、過去の災害の痕跡を読み解き、今後の防災に役立てることも重要な課題です。学生と共に絵図や古地図を手にフィールドを歩き、地域住民とのふれあいを大事にしながら、現代社会と深く関わる歴史研究を模索していきたい、と念じています。

博物館学課程

学芸員は、収集した史・資料を研究し、守り、伝え、未来へとつなぐ。もっともっと、アクティブなミュージアムへ

概要

歴史ある博物館学講座。理論と実践でミュージアムを深く学び、学芸員資格を取得する

学芸員は、社会教育・生涯学習や文化芸術の推進という公共的な役割を担うミュージアムの中心となって、資料の収集・保管・調査研究・展示・教育普及というプロセスを通してあらゆる人々に還元し、包摂性、多様性と持続可能な社会を育んでゆくスペシャリストです。

本学の博物館学講座は、1951年に公布された博物館法に基づいて1957年に開講され、60有余年の歴史があります。この間、本学が専門とする学問領域と整合した人文系のミュージアム(主に考古・歴史・民俗・美術・文学)を視野に入れていく中で、およそ7000名に及ぶ有資格者を輩出し、現在も多くの卒業生が学芸員として活躍しています。本講座では、そうした実践や研究の蓄積を土台に、21世紀の社会にも関心を向けながら、次世代のミュージアムを担う人材の育成を目指していきます。

教員紹介

	氏　名	専門分野／主な研究テーマ
教　授	内川 隆志 Uchikawa Takashi	博物館学／博物館学史、博物館資料論、文化財保護史
教　授	山本 哲也 Yamamoto Tetsuya	博物館学／博物館史、博物館学史、博物館教育、バリアフリー・ミュージアムマネジメント
助　手	伊東 俊祐 Ito Shunsuke	博物館学／博物館社会史、博物館教育学、ミュージアムスタディーズ

主な授業

学芸員資格の取得には、博物館法の規定により国家試験か大学での単位修得の２方法があります。本学での単位修得は、博物館法施行規則に定める生涯学習概論、博物館概論、博物館資料論、博物館資料保存論、博物館展示論、博物館教育論、博物館経営論、博物館情報・メディア論(以上２単位)、博物館実習(３単位)の９科目19単位の履修が必要となります。

博物館実習A・B(３単位)

- 内川隆志教授
- 山本哲也教授
- 池田榮史兼担教授
- 深澤太郎兼担教授

学内実習と見学実習で構成されています。学内実習は、春期・夏期集中講座として実施しており、主に人文系資料に関する知識とその扱い、展示・教育普及の実務に関する技術の修得を目的としています。見学実習は、1泊2日で関東近隣の博物館や美術館を見学することで、実際の現場における活動や管理状況を把握することを目的としています。

大学院での博物館学コース

大学院文学研究科史学専攻に、学問としての博物館学をより専門的に学べる博物館学コース(修士・博士)を設置しています。本コースでは、博物館学の論理に関する知識の修得や研究能力を培うための演習・講義に加え、学芸員養成の延長線上としてもより臨床的な実習を開講しており、國學院大學博物館をはじめ現場での実務実習を実施しています。修了後は、学芸員や研究者の道に進んだ人もいます。

教職課程

歴史・社会を学び、現在を見つめ直す
そして、未来をつくる人を育てる
それが「教える」という仕事

概要

専門的知識と教養とを兼ね備え、
教育現場で活かせる教員を目指しましょう

本学は「教職の國學院」ともいわれ、今日までに多くの教員を社会に送り出してきました。史学科では、教職課程の科目を履修し要件を満たすことで、中学校教諭免許状(社会)、高等学校教諭免許状(地理歴史)を基礎免許として取得することができます。教職課程では、学びの本質、教員の役割、授業づくりに大切なこと、などを考えつつ知識を深めていきます。学科で身につけた専門的知識と幅広い教養とを、現場で活かせる教員がいま求められています。

教員紹介

	氏　名	専門分野／主な研究テーマ
教　授	澤田 浩一 Sawada Koichi	社会科教育、公民科教育、道徳教育史
准教授	多和田 真理子 Tawada Mariko	日本教育史、教育学／近代地域教育史、学校の設置運営と地域社会

主な授業

1年目には、教育の思想や歴史、現代社会における教育のあり方などを学びます。「教職論」などの授業を通して、教育や教職に対する自身のイメージを、生徒の視点だけでなく教師側の立場からも深めていきます。

2年目からは、「社会科教育法」などの授業で、実際に授業をデザインする際に必要なことを学んでいきます。学習指導案(授業の計画)を作り、実際に「教える」経験をしてみることで、自分の学問観・教育観が変わるかもしれません。

3年目には、生徒指導や教育相談など学校生活全体に関することも学びます。また、実習校との交渉、事前指導にあたる「教育実習IA」などで、教壇に立つ心構えを固め、準備を進めます。

そして、多くの人は4年目の前期に教育実習を行い、「先生」を経験します。後期の「教職実践演習」で、教育実習の経験や教職課程での学びを振り返り、自身が教師となるに当たっての課題と向き合います。卒業後、教職に就いた後も、学びは続きます。大学の4年間は「学び方を学ぶ」日々なのです。

教員からのメッセージ

「学ぶこと」、「教えること」を
本気で考えましょう。

教員免許取得のために履修が必要な科目は、決して少なくありません。科目ごとに予習復習や授業準備などの課題もありますし、介護等体験や教育実習なども受ける必要があります。「免許だけとっておこう」という考えは通用しないでしょう。

しかし「学ぶ」というのは人間の本質的な営みでもあります。まずは自分自身が、史学科での学びに、本気で取り組んでください。専門的知識と、学ぶことへの熱意があってこそ、教員として奥深い授業をすることができるのです。そして、学ぶとは何か、教えるとは何かを本気で考えましょう。そのために役立つのは幅広い教養です。生活の中で、多くのことに興味をもちましょう。いろいろな活動に参加するのもよいことです。それらのすべてが糧になる、それが教員という仕事です。

Kokugakuin University Department of History

Topics

“実証史学”の立場から、古代天皇制の歴史を分析してみよう。

教授　佐藤 長門

左：「御即位図」（國學院大學博物館所蔵）
右上：『続日本後紀』巻五（國學院大學図書館所蔵）
右下：京都御所　紫宸殿

日本時代史Ⅰ・Ⅱでは、古代天皇制がどのような変遷をたどっていったのかを中心に、前期のⅠでは８世紀を、後期のⅡでは９世紀から10世紀前半までを講義していきます。

みなさんが中学・高校で学んできた古代史をふり返ってみると、７世紀までの令制以前の段階においては蘇我氏などの、８世紀からの律令国家の時期においては藤原氏などの、氏族を主役にした歴史事象の説明や解釈がなされてきたのではないでしょうか。それは戦後の歴史教育が、戦前・戦中における極端な天皇中心の歴史観、いわゆる“皇国史観”にもとづく歴史教育の反省から出発したため、天皇と対比される存在として氏族に焦点をあてた歴史教育が実践されてきたからでした。このような氏族中心の歴史叙述は、中世以降の幕府政治をになった源氏・北条氏・足利氏・徳川氏などを基軸とする記載とも親和性をもち、また日本列島各地に勢力をはっていた地方豪族の掘り起こしにもつながり、権力者の物語だけではない新たな古代史像を“発見”するきっかけにもなった点で、評価すべき方向転換でありました。

ただここで忘れてはならないのは、好き嫌いは別にして、日本古代は“専制君主制”の時代であったということです。つまり当時の最終的な判断は蘇我氏でも藤原氏でもなく、天皇（大王）が下していたのであり、その姿を歴史の表舞台から隠してしまったのでは、正確な歴史解釈はできなくなってしまうのではないかと思われます。

國學院大學の史学科は、その創立当初から史料にもとづいて歴史を構築する“実証史学”を標榜してきました。日本古代の史料には、天皇や氏族はどのように描かれているのでしょうか。それは、みなさんが中学・高校で習ってきた教科書的な古代史と、はたして同じなのでしょうか、あるいは違うのでしょうか。日本時代史Ⅰ・Ⅱでは、以上のような問題関心のもと、戦前・戦中におこなわれた天皇中心史観でも、戦後一貫して続いている氏族中心史観でもない、“実証史学”にもとづくニュートラルな立場から、古代天皇制の歴史を分析する実験をおこなっています。この試みが成功しているのか否かについては、ぜひみなさん自身の眼で確かめてみてください。

膨大な蔵書から新しい歴史をみつけよう

國學院大學図書館

本学の図書館は、半世紀あまり利用された旧館の閉鎖にともない、2008年に学術メディアセンター(AMC：Academic Media Center)内にリニューアルオープンしました。2階・3階には開架スペース、参考図書室、グループ学習があり、1階・地下2階部分には日本有数の収蔵能力をもつ書庫が設置されています。

國學院大學の長い歴史ともに歩んできた図書館は、勉強に励むにふさわしい落ち着いた環境を整えています。歴史・文学・宗教など人文学研究の専門書も揃っていて、みなさんの4年間の勉強や卒業論文研究を支えてくれることでしょう。

リニューアルとともに、オンラインによる書誌情報、アーカイブス、外部データベースへのアクセスも容易になりました。また、本学は8大学による「山手線沿線私立大学図書館コンソーシアム」、13大学による「横浜市内大学図書館コンソーシアム」に加盟しています。これらのネットワークを最大限に活用しながら、新しい研究を進めることもできます。

日本の伝統文化の奥深さを
膨大な実物資料で実感する

國學院大學博物館

1882年に創立されて以来、國學院大學では日本の伝統文化を明らかにするためにさまざまな研究を行ってきました。この研究の基礎資料として威力を発揮してきたのが、図書館に納められている膨大な書籍類と考古資料・神道資料など、大学が所蔵する実物資料です。これらの実物資料を、展示しているのが、國學院大學博物館です。

ここでは、校史・考古・神道という三本柱のテーマによる展示を行っています。いずれも國學院大學が長年研究してきた国学の基礎となるもので、日本の伝統文化を理解するうえで、きわめて貴重な資料です。

夏期・冬季休暇や展示替えの休館以外は、日曜日も含め自由に見学できますので、より多くの方にご覧いただき、勉学の手助けにしていただくとともに、日本の伝統文化の奥深さを実感していただければと思います。

在学生に聞いてみよう。

座談会

國學院の史学科って、どんなところ？

歴史を本格的に学んでみたい！
でも、
具体的にどんな勉強をするのかな。
高校時代の学びとの違いって何？
そして、その面白さは？
在学生たちに聞いてみました。

- **杉山 航太郎**さん
  4年　外国史学コース
- **高澤 ミシェル 優希**さん
  4年　日本史学コース
- **高橋 怜土**さん
  4年　考古学コース
- **中里 旬香**さん
  4年　地域文化と景観コース

（※2022年1月収録）

國學院大學の史学科を選んだ理由

杉山　僕は、歴史のなかでも、世界のいろいろな成り立ちというか。たとえばエジプトにはピラミッドがありますが、それを造る前はどうだったんだろう。何もなかった0から1を生み出した人たちの営みや考え、文化に興味がありました。それで、日本の縄文時代よりももっと以前に文明を築いた外国の古代史、とくに古代ギリシアの文化などを学びたいなと思って外国史が学べるところを探し、最終的に高校時代の予備校の先生に勧められて、選びました。

高橋　もともと小学生や中学生のころからいろんな博物館に行っていろんな資料を見るのが好きでした。そのころから考古学に興味をもち、さらに地域の人々の生業や暮らしについても知りたくて民俗学も学びたいなと思っていました。國學院大學の史学科は、考古学研究でも歴史と伝統がありますが、副専攻で民俗学も学べることがわかり、それで志望しました。

高澤　埼玉県の行田市の出身です。行田市には、戦国時代の終わり豊臣秀吉の関東平定の際に石田三成らの水攻めに耐えた忍城（おしじょう）があるということでも有名なのですが、ほかにも「金錯銘鉄剣（きんさくめいてっけん）」が出土した稲荷山古墳があって、小さいころからその古墳のある公園で遊んだりしていたので、歴史が身近に感じられる環境にあったんだなあと思います。高校までは日本の戦国系の漫画とかアニメとかが大好きで、日本刀鑑賞にはまっていました。なんとなく日本史が楽しいなと思い、進路を考えていたとき、日本史の先

生が國學院大學の史学科を勧めてくださいました。その先生が普段の大学、学生のようすを見たほうがいいとアドバイスしてくれ、オープンキャンパスでない日に来てみました。すると、学生も大学も落ち着いた感じで好感がもてました。ここなら勉強に集中できそうだなと思って志望校に決めました。

中里　私の場合、もともと教科のなかで日本史が好きだったからです。歴史をもっと学んだら面白いだろうという軽い気持ちと、大学推薦の指定校にあったからです。でも、実際に國學院大學を訪れてみると、キャンパスが広すぎず、校舎の建物も美しく整い、さらに図書館がすごく充実していました。日本史ならば何でも揃っていそうな図書館は、とても魅力的だったので決めました。

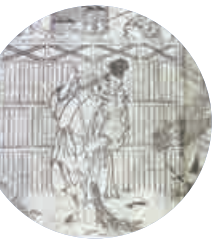
それぞれの専攻コースでの学び

杉山　古代ギリシアについて学びたいと取り組みましたが、外国史は違う言語の文献を読み込んでいくので、すごく大変でした。外国史研究で特定の分野を追求しようとすると、日本語で読めるものがほとんどありません。今、その研究をしている人はアメリカにいるとなれば英語の論文をひたすら読みます。また、古代ギリシアを学ぶにはギリシア語は必要だろうと思って、学科を超えて、哲学科の先生のもとで２年間ギリシア語を習いました。卒論では、いろんな国の美術館のホームページにアクセスして、イタリア語やフランス語、ドイツ語に困ったこともありましたが、そうやって学んでいくうちに世界にはいろいろな言語があり、それが文化や歴史を知るうえで大切だと視点が広がったと感じました。その言語がわかった瞬間に「あ、そうだったのか」と一歩近づいた気がする。大久保桂子先生から教えていただいた、世界をグローバルな歴史として理解、把握していくということが実感できました。

高橋　私は、考古学を学びたくて考古学専攻に入ったのですが、いろいろと学んでいくとその興味をどこまで自分の研究として追求していくかなど奥深さを知りました。

それに学ぶのは知識だけじゃないと。私は、１年生の時から夏の発掘調査の実習に参加したのですが、２週間の調査期間ですが、発掘調査は学生や教員などメンバー全員で連携しチームで行っていくことが求められます。まず調査方法を組み立て、記録し、土層の堆積状況や遺物の出土状況などを見て具体的に瞬時に判断し、掘り進めます。さらに大学に帰れば、遺物の整理作業をします。そこでも連携です！（笑）　研究をするうえでも、そして仕事に就いたあとも活かせると思うチームワークの大切さも学びました。

高澤　どこのコースに入るか悩んでいたとき、髙橋秀樹先生の平安時代の公卿と称された貴族の日記を読む授業を受けました。それは私のなかにある平安貴族のイメージをくつがえすものでした。ゲームや創作漫画にある詩歌管弦や蹴鞠を楽しみ、雅やかに遊んでいるだけではなく、実際には官僚なので、忙しい。今でいう議会のような会議をし、政治運営をしていたわけです。史料を通じて貴族の実態や読み解く面白さを知り、興味を持ちました。



それから、驚いたのは、くずし字で書かれた史料を読める人がけっこう多かったということです。國學院大學のサークルに属して読めるようになっていた人もいましたが、なかには高校の部活で史料を読んでいた人もいて。初めは焦りましたが、ゼミの友だちに聞いたりして、私もだんだん読めるようになっていきました。

中里　私にとって、大ヒットだったのが、「地域文化と景観コース」の林和生先生の授業です。江戸の古地図をもとに学生それぞれが町を歩きレポートにするのですが、私の担当は浅草の絵図でした。実際に歩いてみると道などがそのまま残っていて驚きました。江戸の町をフィールドワークすることの楽しさ！　この研究は、過去と未来を考えられるコースです。今ある景観の過去、そしてその景観を今後どう残していくのか。過去のことだけでなく未来のことも考えていけるのが魅力です。

史学科でのいろいろな学び

中里　私は、日本史がちょっと好きくらいな軽い気持ちで入ったので、２年生くらいから本格的になっていくと難しくなっていって、いろいろと友だちに教えてもらい、助けられました。きっと歴史を学びたい、研究したいという共通の気持ち、大前提があるからなのでしょうね。持つべきものは、友！史学科において大いに学べました（笑）。

高澤　火焔型土器を極めたいとか、毛利氏を研究したいとか入学時からやりたいことが決まっている人も多いですね。私は、刀が好きなので、居合道部に入ってけっこう熱中していました。
なので、４年生の博物館実習で刀剣専門の博物館の学芸員さんから学べたことはとても嬉しかったです。刀剣の刃文の見方などいろんなことを一から現物を見ながら教えていただき、感激しました。博物館学課程は教科も多いですが、文化財についての認識が深まると思います。

高橋　考古学コースは、旧石器や縄文、弥生時代といった先史を専攻する学生と文献のある時代の歴史考古とあるのですが、いずれも先輩たちとの距離が近いですね。授業以外でも遺物の整理作業で土器や石器などの資料の見方、それにいろいろな計測のスキルや考古学についての考え方をちょっとずつ教えてもらえるのが体験として大きいと思います。

杉山　外国史コースは、近現代を研究する先生が多いのですが、私が紀元前５世紀を研究したいと相談したら、「自分のやりたい研究をしていいよ」と励まされました。古代ギリシアなので哲学科など他学科の先生につないでもらえました。研究の方法論をしっかり教えてくださった大久保先生やプロフェッショナルの先生方に感謝しています。
歴史というのは、地域、国ごとではなく地球の歴史としてグローバルに見ていく方法、考え方が必要なのだとわかりました。まさに、今、問われているグローバルワイドの見方です。もうすぐ社会人ですが、もう少し日本史を勉強していきたいなと思っています。

すぎやま こう たろう
杉山 航太郎さん
４年　外国史学コース
千葉県立八千代高等学校卒

就活では、古代ギリシア史を専攻したのは私だけでしたが、いろんな人の力を借りて、研究を進めることができましたとアピール。好感度がよかったようです。

たかざわ　ゆうき
高澤 ミシェル 優希さん
４年　日本史学コース
埼玉県立熊谷女子高等学校卒

もともと刀好き。刀や浮世絵など文化財を勉強したいと思っていたのですが、公卿の日記を扱った授業で、研究の面白さにもはまりました。

たかはし　りと
高橋 怜土さん
４年　考古学コース
盛岡白百合学園高等学校卒

実際に発掘調査していくと、その現場ではいろいろな役割を互いに担いながら進めていくことが大切。そのことを体験も「発掘」できたかな。

なかざと　しゅんか
中里 旬香さん
４年　地域文化と景観コース
神奈川県立横浜立野高等学校卒

やはり図書館がいいですね。歴史研究の個性的な先生が揃っていらっしゃるので、直接いろいろ先生方の個性に触れられるのもいいです。

Kokugakuin University Department of History Topics

若手からベテランまで、歴史研究の最前線が体感できる

国史学会

1909年(明治42)11月に発足した国史学会は、2019年に110周年を迎え、史学科とともに長い伝統をもつ歴史の学会です。本学史学科(旧・国史学科)の卒業生を中心に活動していますが、他大学や研究機関の方々も会員に擁する全国規模の学会です。

現在は、6月に総会と大会(公開講演会・研究発表会)、例会(6～8月を除く毎月)を開催し、若手からベテランまで幅広い世代の研究者が、日頃の研究成果を発表しています。例会は、日本古代史・日本中世史・日本近世史・日本近現代史・外国史・歴史地理学・考古学・博物館学の各部会が毎年1回ずつ開催し、3月例会は史学科と共催で卒業論文報告会をおこなっています。

また、機関誌である『国史学』は1929年(昭和4)11月に創刊、現在は年3冊が刊行され、2022年3月時点で第234号まで刊行されている歴史ある雑誌です。古代史から近現代史までの日本史を中心に、考古学・歴史地理学・博物館学など歴史に関わる多彩な分野の論文・史料紹介・書評などを満載しています。

大会と月例会は非会員でも自由に参加できます。歴史研究の最前線を体感できる場でもあるので、みなさんの積極的な参加をお待ちしています。

機関誌『国史学』

卒業論文報告会は4年間の集大成

歴史学をより専門的に研究できる國學院大學大学院

皆さんが大学を卒業してさらに勉学を続けたいと思った時には、大学院に進学して、修士号・博士号の取得をめざすことができます。歴史学をより専門的に研究するのであれば、大学院文学研究科の史学専攻に進学することになります。

大学院の授業は史学科の教員が担当しています。また、文学部では哲学科所属の美学・美術史の小池寿子教授(西洋美術史)、藤澤紫教授(日本美術史)も、大学院では史学専攻に所属していますし、博物館学の内川隆志教授も史学専攻の所属となります。ほかに、歴史学の諸分野で活躍している数多くの先生方も兼任講師になるなどして大学院の授業を担当しています。学部の専任教員以外に数多くの先生方の授業を受けることができるのは、大きな魅力の一つです。

大学院で得られる専門性は、研究職のほか、教職や学芸員にも必要とされています。多くの修了生が大学・高校の教員、全国各地の博物館、発掘調査の現場で活躍しているのは、本学大学院の特徴といえるでしょう。進学した先には専門家になる道以外はないと思うかもしれませんが、大学院での研鑽を基礎に一般社会で活躍している先輩たちもたくさんいます。長く勉学を続けたいと思っている皆さんは大学院への進学も選択肢の一つに加えておいてください。

史学学生研究室

研究の最前線を目指す

卒業生からのメッセージ

史学科から社会へはばたいた卒業生からのメッセージです。

都築 葵惟さん

考古学コース132期卒／大手証券会社

入学当初は歴史が好きだからという理由で史学科を選んだため、何を専門的に学ぶかは決まっていませんでした。しかし、２年次に遺跡の発掘調査に参加したことにより考古学に興味を惹かれ、先史考古学を専攻しました。この調査には３・４年次にも参加しました。ただ知識をつけるだけでなく実際の遺物に触れる機会が多かったため、学年が上がるにつれ自分の成長を実感することができ、楽しく学ぶことができました。また、10日間大人数で協調しながら調査を行うため良い経験になりました。

卒業論文の執筆は大変なことも多かったですが、大学には多数の報告書が所蔵されており、互いに意見交換のできるゼミの仲間もいたため研究に打ち込むことができました。この４年間を通してチームワーク力と論理的思考力が身についたと感じています。

山田 恵生さん

日本史学コース132期卒／宮内庁

私が本学の史学科を志望したのは、それまで学んできた「歴史」という教科が好きだからでした。しかし入学して最初に、高校までの「歴史」とこれから学ぶ「歴史学」とは、全くの別物だということを教えていただきました。ただ暗記するだけでない、自ら史料にあたって、史上で起きた事実を発見していく学問こそ「歴史学」なのです。それまでの「歴史」とは違って、過去の出来事を自分で見つけていく、自分が歴史を解明していくというところに、私は歴史学の面白さがあると感じています。

とはいえ、高校まで学んできた「歴史」との差異から、最初は分からないことばかりでした。私の場合は４年をかけて徐々に「歴史学」の方法に慣れていくことで、やっと卒業論文が書けたと思います。私は古代史の佐藤長門先生のゼミに所属し、「摂関政治と母后」というテーマで研究をしました。皆さんも「歴史」を「歴史学」として、より深いところまで学んではみませんか。

宮原　愛さん

日本史学コース132期卒／公立学校教員

私は、大学で日本史学コースと教職課程を選択しました。大学３年次からは日本古代史の山﨑雅稔先生のゼミに所属しており、そこでは自分自身で疑問を見つけ、それに対して探求すること、それを自分の言葉で論じることの大切さを学びました。また、日頃の授業での発表のほか、夏休みや春休みには合宿があって、ゼミ生とも交流を深められる機会があり、それによって議論を深められるため、さらなる歴史への探究心が身についたと実感しています。

来年から私は教員として働きます。歴史だけに限らず、どんな授業においても、史学科で学んできたを生かして頑張ります。そして、それを生徒に教えられるように頑張ります。

最後に、史学科では歴史から様々な観点を学ぶことができ、それはこれからの社会を生きる上で役立つと思います。さらに渋谷という立地も良いので、仲間とともに充実した大學生活を過ごすことができるのではないかと思います。

出口 颯涼さん

日本史学コース129期卒／大学院文学研究科史学専攻博士後期課程在学中

僕は史学科での４年間、日本近現代史のゼミやサークルなどで友達と楽しい日々を過ごしました。また、史学科での学びを通じて、自分で史資料を分析して歴史を紡ぎだすという歴史学のスタイルに興味を惹かれ、歴史をもっと研究したいと思い、國學院大學の大学院に進学しました。國學院の大学院は現役の大学院生の数が多く、互いに切磋琢磨しながら研究をすることができます。加えて、国内の学会だけでなく、海外でも研究報告をする機会を得ました。大学院生になると、国内だけでなく海外の研究者・院生とも交流することができ、研究者としての視野も広がります。

史学科での４年間では、たくさんの学びや思い出を得ることができます。そして、将来は歴史の研究者になりたい、歴史を究めたいと思ったら、ぜひ國學院大學大学院への進学も考えてみてください。

黒須　啓さん

地域文化と景観コース132期卒／株式会社CIJネクスト

大学では地域文化と景観コースの川名禎先生のゼミに所属しました。少人数を生かしたゼミでは、自分の成長に応じた指導を受けることができました。また、週末や長期休暇を利用しての城下町巡検や離島のフィールドワークでは、調査の視点や方法、調査の楽しさと重要さを学ぶことができました。

史学科には大学院への進学や教職・学芸員を目すための Profeesional Career Program が用意されており、研究やアルバイトを行う中でも、中学校・高校の教員免許と学芸員資格の免許を取得することができました。

卒業後は大学院に進学し、引き続き研究を行いたいと考えています。國學院では、学部において大学院の授業を体験し、進学を考えることができる環境が整っており、進学を決めるきっかけになりました。教職などの資格の取得や進学を考えている方は、決して不自由のない環境ですので、思いっきり勉学に励んでください。

相田 涼乃さん

日本史学コース132期卒／新潟県庁

幼少期から民謡に親しみ、着物や民謡に歌われている平家物語に興味を持ったことから歴史が好きになり史学科を志望しました。大学３年からは山﨑雅稔先生のゼミに所属し地元である佐渡ヶ島について古代の視点から研究を行いました。コロナウイルス流行により思うように交友関係を広げられずにいましたが、ゼミ合宿や日々の授業を通して友人と仲良くなれたことをとても幸せに思います。

高校までの歴史は暗記科目と言われることが多いと思いますが大学での歴史学はまるで違い、史料を読み自ら歴史を構築していくことができます。複数の史料を照らし合わせ論理的に説明することの難しさや楽しさに触れることができると思います。

長いようで一瞬で過ぎてしまう４年間を國學院大學史学科で大切な仲間とともにぜひ楽しんでください！

石田 太朗さん

日本史学コース126期卒／日本液炭株式会社

私が史学科を志望したのは、日本近現代史に興味があり、専門的に学びたいと考えたからです。入学後は、歴史研究サークルに所属し文化祭で研究発表を行っていました。日本時代史や日本史特殊講義などの、日本史の授業や学芸員資格の授業を履修していました。３年次からは、日本近現代史のゼミに所属し、卒業論文は嘉仁皇太子（後の大正天皇）をテーマに作成しました。

私は現在、炭酸ガスの国内トップシェアメーカーの工場の総務をしています。工場の出荷作業や、従業員の保険等の申請、経理など業務は多岐に渡っています。卒業論文作成で得た正しい情報を選択するということは、日々の業務に生かされていると実感しています。

最後に、國學院大學の史学科を受験しようと考えている方にアドバイスを送るとすれば、英語の勉強を頑張って下さい。史学科を受験される方は、歴史・国語ではあまり差がつかないので、英語で差をつけられるように頑張って下さい。

竹内 華奈さん

日本史学コース127期卒／東日本旅客鉄道株式会社

もともと高校１年次から史学科を志望していました。その後２年次の進路相談の際、他大学史学科卒の担任教師から本学を強く勧められたため、本学の史学科を志望しました。

そして、矢部健太郎教授のゼミに入り、卒業論文は「後北条氏の対外関係―越相同盟を中心に―」という題目で書きました。

就職は、東日本旅客鉄道株式会社のプロフェッショナル採用で内定をいただきました。プロフェッショナル採用は現場第一線での業務を主としており、まず駅員として勤務し、のちに車掌や運転士など様々な方面へ進んでいきます。

自分が今何を一番学びたいのか、将来何をしたいのかを今一度考えてみてください。両親に話しづらければ友人・兄弟・教師に相談するのもいいと思います。大多数の方が両親に学費を払ってもらうことになると思いますが、その学費をどう使っていくかは自分次第です。後悔のない学生生活を過ごせるよう応援しています。

長谷 勇汰さん

地域文化と景観コース127期卒／株式会社日本アクセス

私は、史学科で学びながら陸上競技部に所属して箱根駅伝を目指し、文武両道の学生生活を送っていました。４年次には、林和生先生の元で「古代ローマの都市景観と人々の生活」というテーマの卒業論文を作成しました。先生は、部活動と両立する私を理解してくださり、テーマに合った文献資料の紹介や的確なアドバイスをくださいました。また、部活動についても温かく見守ってくださいました。國學院大學では、先生方が優しくバックアップしてくださり、自ら探求心を持って学ぶ人をサポートする環境が整っています。是非、國學院大學の史学科で学生生活を楽しんでください。

桐田 拓実さん

地域文化と景観コース132期卒／NTTアーバンバリューサポート株式会社

私は昔から立花宗茂が大好きで、関連した研究をしたくて史学科に入りました。専攻は地域文化と景観コースで、ゼミでは川名禎先生の下、水郷で有名な柳川の掘割について研究しました。私は旅行が好きなので、フィールドワークを通じて、現地と古地図との違いを比較する研究手法が性に合っていました。また、先生との距離感が近いために話しやすく、このゼミを選んでよかったとつくづく感じています。

このコースでは地域を紐解く力を養いながら、景観保全の意義なども学びました。それもあり、地域文化や景観を大切にしたエリアマネジメントで、地域活性化の一端を担う企業を志望しました。

史学科では歴史の知恵とロマンを学ぶことができます。史学的な視野を身につけられることは、他の学科生との大きな違いです。さらに、あえて史学と関係のない課外活動などにも取り組むことで、総合的に成長できる充実した４年間になるはずです。存分に楽しんでください！

國分　梓さん

日本史学コース 123期卒／博物館学コース博士課程前期125期卒／
東京国立博物館学芸研究部列品管理課登録室アソシエイトフェロー

大学では日本古代史の山﨑雅稔先生のゼミに所属し、少人数のゼミできめ細やかな指導を受けることができました。渋谷という場所柄、様々な博物館・美術館に足を運びやすく、本物を間近に見る機会を多く得られたことも良い経験となりました。

現在、私は東京国立博物館にて収蔵品の管理をする部署に所属しています。展示替えや作品撮影の補助等では、直接作品を扱う機会も多くあり、積み重ねられてきた歴史の重みを感じながら日々の業務に励んでいます。

好きなことを突き詰めていく道のりは険しいけれど、何事にも代えがたい喜びがあります。ぜひ充実した環境のなかで、好きなことに没頭できる貴重な時間を過ごしていただければと思います。

大村 悠馬さん

日本史学コース129期卒／埼玉縣信用金庫

「就職に不利」との理由で両親は史学科に行くことに反対でした。しかし歴史に興味のあった私は、その反対を押し切る形で史学科へ進みました。

入学後は興味のある講義をひたすら聴き、日本近現代史の手塚ゼミへ入りました。卒論テーマ決定後、就活においても業界を問わず様々な企業の説明会に行きました。

就職先は信用金庫です。一見、歴史と関係無さそうですね。しかし在学中に自然と身についたスキルは、現在の仕事で大いに役立ってます。例えばゼミでのプレゼンは商品提案の際に、卒論で鍛えた考察力・文章作成力は、会議資料や意見書作成に活かされています。そして何より歴史が好きな人は多く、会話は結構弾むんですよ！

受験生の皆様、もし歴史に興味があれば史学科は悪くない選択肢です。就活に不利なことは無いですし、４年間好きなことを学べるなんてお得だと思いませんか？

布川 美月さん

地域文化と景観コース127期卒／東亜道路工業株式会社

私が大学生活で得たものは常に批判的な視点で物事を考えることと様々な考えを持っている友達です。卒業論文では洛中洛外図屏風をテーマに京都の民衆の生活や娯楽について研究をしました。過去の研究者の考えをそのまま鵜呑みにするのではなく読みながら批判的な視点を持つことで自分の考えにより深みを出せるようになりました。卒業論文の執筆にあたり行き詰ることも多くありました。その時にゼミの先生や史学科の友達と色んな話をしたりすることで息抜きになっていました。ゼミの先生には卒業論文以外の話も沢山しました。史学科の友達は専攻も違っていたため悩んだ時には自分とは異なる考えが聞けていつも刺激をもらっていました。

大学生活は長いようで短かったですが、沢山の人に出会えた充実した４年間でした。

福嶌 彩子さん

考古学コース123期卒／松本市役所教育部文化財課

「史学」と一言に言っても、様々な時代や領域、分野があります。史学科では歴史にまつわる多種多様な講座が設けられています。ここでなら自分が本当に学びたいことを見つけることができると思い、史学科を志望しました。

私が選択した考古学専攻では、遺跡を発掘して、本物の遺物に触れ、自分たちの調査成果を報告書として刊行できる機会があります。とても実践的な内容を学ぶことができたため、現在の仕事の中でも活かされていることが数多くあります。

本当にやりたいことを見つけた時、いつでもその分野に突き進んでいける環境が史学科にはあります。何かを始める時に遅すぎるということはありません。大学生活の中で学びの領域を広げ、自分の可能性を見出していってください。

照井 朝香さん

日本史学コース132期卒／株式会社マツモトキヨシ総合職

高校３年次、当時の担任の先生に史学だったら國學院とおすすめされ受験しました。入学時からコロナ禍のため式典などは無く授業は全てオンラインと異質なスタートだったと感じています。段々と対面が増え３年からのゼミは日本古代史を選択しました。入学前は中世史をと思っていましたが、授業を受けるうちに自分がやりたいのは古代史だと気づきました。

卒業論文は古代の喪葬儀礼史に関してです。卒業後は民間企業に進むため今後歴史を最大限に学ぶ機会はないと思い、その集大成として卒論には意欲的に取り組むことができました。

史学は専門職でないと役に立たないと評価されがちですが、史料を集成･比較･検討し、それに説得力を持たせることは学んでいないと難しいです。この力は就活や社会人でも活用できるため史学科にコンプレックスを抱かず、自分なりの疑問を見つけ充実した４年間を過ごせるよう頑張ってください。

飯野 拓哉さん

考古学コース126期卒／株式会社パスコ

私は在学時、先史考古学を専攻していました。入学当初はただ遺跡の発掘というものをやってみたいというだけだったのですが、その学問の面白さに触れ、次第にのめりこんでいきました。同時につらいことも多々ありましたが、自分を成長させることができたとても有意義な時間を過ごすことができたと思います。

そんな大学生活を経て、私は現在、主に埋蔵文化財に関する仕事をしています。地面の下から出土する遺物は、遥か昔に生きていた人々の痕跡です。それを記録・保存し、後世に残すことが私の仕事です。遺物は当時の人々の真実を語ってくれますが、それを正しく理解するのは困難を極めます。しかし、同時にとても面白いと私は思います。國學院大學では発掘調査も毎年行っているので少しでも興味があればぜひ参加してみてください。

齋藤 友起子さん

地域文化と景観コース126期卒／株式会社巴商会総務部

まず、私が本学の史学科を志望したきかっけとして、一つはシンプルに歴史が好きだったからです。そして、もう一つは、本学の史学科は、歴史を学ぶ上での環境が整っていると思ったからです。本学の史学科は、時代や分野ごとに専門的な知識を持った教授がいるため、１、２年の時には幅広い時代について学び、３、４年の時には、自分が興味を持った分野について深く学ぶことが出来できます。

そして、その中で私は地域文化と景観コースを専攻し、浮世絵についての卒業論文を作成しました。大学生活の中でも一番苦労しましたが、その分、やりがいと達成感を味わうことが出来ました。

現在は、商社の人事課に勤務しています。史学とは直接関係のある仕事ではないですが、大学生時代に学んだ探求心や好奇心を活かして日々精進しています。

辻本 晴香さん

外国史学コース126期卒／大手百貨店勤務

私は高校時代一番好きな科目が世界史でした。そのため、史学科なら大学の四年間も充実して過ごせると考え、志望しました。大学では中国の歴史に興味があったので、東アジア近現代史を専攻しました。史学科の授業では自分から発言することや、議論する機会が数多くあるので自分の視野を広げることができます。もちろん、歴史以外にも様々な分野の講義が開講されているので好きなように多くの知識を得ることができます。３年生になるとゼミにはいり、卒業論文に取り組みます。大変だった思い出もありますが、それ以上に楽しかった思い出や達成感があります。國學院大学には歴史を学びたい学生をしっかり支えてくれる環境が整っていますので、素敵な大学生活がおくれます！

専任教員からのメッセージ

ゼミ・研究室紹介

日本史学コース

佐藤 長門（さとう ながと）

■ 日本古代史

高校までの「与えられた歴史」、ただ教科書の記述を覚えるだけの歴史とは異なり、大学で学ぶ歴史学はみずから「創り出す歴史」、教科書の記述すら疑うことからはじまる歴史です。つまりそれまでの通説を疑い、それを批判していくものなのですが、その批判は単なる思いつき、空想であってはなりません。歴史学が「学問」を標榜する以上、史資料にもとづいた合理的な根拠が必要になってくるのです。先行研究を鵜呑みにせず、史料にもとづいて批判する能力を養成することを目的として、３・４年次の演習では六国史の最後にあたる『日本三代実録』を取り上げ、学生と輪読をおこなっています。ぜひ一緒に、日本古代史を勉強してみませんか。

山﨑 雅稔（やまさき まさとし）

■ 日本古代史

日本古代史は、日本がまだ倭と呼ばれていた時代から平安時代までの歴史を扱います。３～12世紀の歴史です。授業演習では、史料の読み方を学びつつ、学説史や最新の研究にふれて日本古代史の理解を深めます。高校の日本史との違いは、自分で歴史を「発見」する点にあります。史書や古文書・木簡などの古代史料の多くは漢文で書かれています。最初は読むのに苦労しますが、少しずつ読めるようになると、新しい「発見」も増えていきます。それが皆さんの歴史研究の第一歩であり、歴史学の一番の面白さであり、熱くなれるところだと思います。

歴史学はこれまでの人間の歩みを様々な角度から明らかにして、私たちの未来を考える学問です。いま、歴史学には専門の知識とともに、広い視野で歴史を見渡す力が求められています。國學院には研究方法の異なる様々な時代・地域の講義が開講されています。それらを通じて、自分の知識を豊かにし、人類の経験を社会に還元するヒントを一緒に見つけてみませんか。

矢部 健太郎（やべ けんたろう）

■ 日本中世史

高校までの日本史の教科書では、「中世」は戦国時代で終わり、「近世」は織豊政権から始まります。実際、日本の大学の史学科でも、織豊期は「近世史」の分野として研究されることがほとんどです。しかし、織豊期を単純に「近世」とすることには、いくつかの問題があります。その最大の問題は、織豊期に続く江戸幕府が、その成立の正統性をアピールするため、特に豊臣期に関する歴史を「改竄」、すなわち書き換えていた点にある、と私は考えています。豊臣期を単純に「近世」と認識してしまうと、江戸幕府の「前史」、すなわち豊臣期の諸事象は江戸幕府にどのような影響を与えたのか、という消極的な検討に留まってしまう可能性もあります。豊臣期そのものを研究しようとすれば、「豊臣政権は中世末期に現れ、近世化を目指して挫折した」という見方が絶対的に必要なのです。そのため、國學院大學の史学科では、織豊期を「中世史」の分野として研究しています。この点は、他の大学にない大きな特徴といえるでしょう。

髙橋 秀樹（たかはし ひでき）

■ 日本中世史

史学科に関心を持っている皆さんは、「歴史好き」かもしれません。でも、皆さんが親しんできたテレビ・アニメ・ゲームや小説が作り出す「歴史」の世界と、学問としての「史学（歴史学）」はちょっと違います。残された資料（史料）から歴史的事実と思われるものを紡ぎ出し、それをその時代の社会や大きな歴史の流れの中に位置づけていくのが歴史学です。中学校や高校で学んだ日本史や世界史は、歴史学の研究成果のエッセンス、しかも、ほんの一部分に過ぎません。歴史学では、史料から結論に至るまでの論証過程が重要になります。その方法を学問として学ぶ場が史学科なのです。ですから、皆さんが「面白い！」と思っていることが、学問としての歴史学にはなじまないこともありますし、逆に歴史学を学ぶ中で、新たな「面白い！」が見つかるかも知れません。

私は、中世前期（院政時代～鎌倉時代）の貴族・武士の社会と政治、貴族の日記や鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』などの史料について研究しています。ゼミでは、質の高い史料を正確に読んで解釈する力を身につけてもらおうと思っています。変化の大きい中世前期の歴史は面白いですよ。

吉岡 孝（よしおか たかし）

■ 日本近世史

私は江戸時代後期から幕末期、幕府の動向や地域社会を主に研究しています。したがってこの研究室には地域史や文化史・幕末の政治史などを学ぶ学生が多く集まります。私は八王子千人同心という幕末期に銃隊編成された江戸幕府の組織を調べていますが、千人同心だけ調べていても実態はわかりません。幕府の政治動向や地域社会の動き、千人同心に武術を教える家を継いだ近藤勇、千人同心と戦火を交えた長州藩のことなどさまざまな事象を調査してはじめて全体像を把握できます。「構想は大きく、実証は小さく」で、関係論文を広く精読し、大きく幕末史なら幕末史を構想し、確実な実証で論文をまとめることが肝要です。江戸時代は大量の古文書が作成された時代です。当然このような古文書を上手に使いこなすことが、実証をする秘訣です。しかし古文書は「くずし字」と呼ばれる難解な書体で記されている上に、現代社会では使用されない難しい語句や、文体（候文）で書かれ、その内容を把握することは容易ではありません。そのため江戸時代に作成された史料を講読し、卒業論文を作成するための史料を使いこなせる能力を涵養することが大切です。

岩橋 清美（いわはし きよみ）

■日本近世史

私は、江戸時代の中期から維新期までの地域文化史を中心に研究しています。とくに注目しているのは、村人たちが自らの村や地域の由緒や歴史を書いた史料です。こうした史料の多くには史実と異なる部分もあります。しかしながら、なぜ、このようなことを書き残さなければならなかったのかを考えてみると、新たな歴史像が見えてきます。また、村人たちは様々な書物を読み、国学者などの知識人と交流することで知識を深めていきました。そして、彼らの知識の蓄積は、地震や洪水といった自然災害や疫病、飢饉などから村を守ることにも寄与したのです。こうした村人たちの姿に私たちも学ぶところがあるのではないでしょうか。近世史研究の基本には史料調査があります。くずし字で書かれた古文書を解読することは容易ではありませんが、一つ一つ丁寧に読み解きながら、自分なりの歴史像を構築することは歴史研究の楽しさでもあります。歴史学を学ぶことによって、自分で課題を見つけ、それを解決していく力を身につけることができると思います。

柴田 紳一（しばた しんいち）

■日本近現代史

國學院の史学科で、学生のみなさんは、数多くの出会い・発見をすることでしょう。図書や史料から教師・友人にいたるさまざまな出会い、はじめて知る多くのことがら、それらは日々の地道な積み重ねからする必然的なものと、わずかなきっかけからする偶然的なものと、いろいろあることでしょう。大切な４年間で、みなさんがそうした経験を少しでも多くできるよう、わたしも心がけてまいります。渋谷のキャンパスもすっかり立派にきれいにかわりました（30年前にわたしが卒業したころに比べて…）。それでもかわらないものがあります。それは、学生のみなさんの学び導かれたいという心と、教師・職員の教え導きたいという心です。この心と心の交流こそが「伝統」の大きな支えなのだと感じています。長く豊かな蓄積と、続く多くの後進との間にある学生のみなさんには、「縁」を大事にして出会い・発見を重ねることを望んでいます。

手塚 雄太（てづか ゆうた）

■日本近現代史

私は1920～60年代の政治史について、政党を中心に研究しています。また、國學院大學がキャンパスを置く渋谷、あるいは東京近郊の地域がいかにして現在の姿になったのかについても関心があります。いずれにせよ、日本史学コースで最も現在に近い時代が専門分野です。

近現代史では、くずし字で書かれた史料以外にも、新聞・雑誌はじめ活字の史料が多数あります。対象とする時代が現在に近いほど史料の字は読みやすくなりますが、その一方で史料の量は膨大となります。卒業論文を執筆するなかでは、大量の史料、そして先行研究に向き合いながら、自分なりの視座を作り出すことが求められます。

大量の史料や研究を読むのは大変ですが、史料と史料を結ぶ新たな関係性を見出した時の爽快感など、史学科で学ぶ歴史だからこそ味わえるものもあります。少し苦しいかも知れませんが、一緒に史料の海に飛び込んでみませんか。４年間で得られるものは少なくないはずです。

外国史学コース

樋口 秀実（ひぐち ひでみ）

■東アジア国際政治史

私のゼミは、東アジアの近代史を中心に、中国・朝鮮古代史以外のアジアの歴史を扱っています。この地域の歴史は、四大文明の３つがあることからわかるように、非常に長く、多様です。なので、３・４年生になって各自の専門が固まってくると、自分の進めている研究テーマは自分にしかわからない、逆に友達の進めている研究は、同じゼミにいるはずなのに、報告を聞いてもよくわからないという珍現象が生まれます。そこで皆さんに期待するのは、自分のやりたいことは果たして何なのかを見つけだす探究心と、他人のやらないことを自分はやってやろうという勇気です。これまでは「友達がやるから自分も何となく」という心持ちだったかもしれません。しかし、史学科に入ってからの４年間では、「自分がこれから歩んでいく道はこの道だ」というものを見つけられるように頑張ってください。

神長 英輔（かみなが えいすけ）

■ロシア近現代史
■東北アジア近現代史

私が研究の対象とする地域はロシア極東と日本列島の北辺です。私は近現代のこの地域の社会と文化の変化を広域の地域史の中で理解し、多様な歴史像を構築しようと試みています。

近現代は植民地主義の時代です。ロシアと日本はこの地を分割し、内なる植民地として支配し、近代世界システムに組み込みました。近現代のこの地域の歴史はロシア史、日本史、東北アジア史、ヨーロッパ史、環太平洋地域史の一部であり、こうした重層的な歴史の中から見えてくるものは多くあります。世界の諸地域や人間集団の関係の歴史、広域の地域の歴史、地域横断的な諸問題の歴史に関心のある皆さん、いっしょに学んでいきましょう。

江川 式部（えがわ しきぶ）

■中国古代史
■中国中世史

中国の歴史社会が研究対象です。私は、中国の伝統社会において、祭祀儀礼を行うことが、社会秩序の維持や国家間の関係構築に、どのような役割を果たしてきたのかについて研究をしています。中国のような多民族・多言語・多人口の国で秩序を維持するためには、古来、法律・軍事・経済面だけではなく、精神面からの統制が必要でした。その役割を担ってきたのが儒学を背景とした「礼」や、道教・仏教などの宗教です。そこから生み出された様々な文化は、「漢文」を通じて周辺各地に伝わり、東は朝鮮だけでなく、海を越えて日本にも影響を与えてきました。

ゼミでは、準備も含め多くの時間を

費やして「漢文史料」を読むことになりますが、眺めるだけではちんぷんかんぷんであった史料の裏に「史実」を見抜けるようになったとき、かつて存在した人や時間だけでなく、これまでの自分やこの先の自分の生き方も見えてくる、そんな体験を味わっていただきたいと思っています。

大久保 桂子（おおくぼ けいこ）

■ 西洋近世史・近代史
■ イギリス近世史

史学科で西洋近代史を志望する学生さんは、かなり大勢います。人気の秘密は、やりたいテーマを選ぶことができるからでしょう。私が担当するゼミ(演習)では、西洋近代史の研究入門書をもとに、各分野、時代の研究動向のなかから、自分が関心をもつテーマを選び、代表的な日本語の研究を読んで、その内容を口頭で報告し、レポートにまとめていただきます。自分がやりたいと思っているテーマは、どう研究すればよいのか、どのような史料があるのか、これによって理解できるからです。これを通じて、自分がやりたい対象を理解するには、欧文文献と原語史料を読む必要があると気づきます。ですからゼミの後半の時間では、英文の研究文献を読む練習をし、語学力のブラッシュ・アップをはかります。難しい英語でも読めるようにならなければ、研究できないからです。本格的な研究レベルに達するには、時間がかかりますが、それを実践して卒業論文に結実できるように、できるかぎり応援するのが私の仕事です。

谷口 康浩（たにぐち やすひろ）

■ 先史考古学
■ 縄文文化の研究

私の専攻分野は先史考古学です。おもに縄文文化を研究しています。私が担当する考古学の授業には「講義」「実習」「演習」があります。「講義」では考古学の基礎知識や縄文時代の研究事例などを教えます。画像や実測図などの視覚教材をできるだけ使うように工夫しています。「実習」では土器や石器の見方、実測図の描き方などを学ぶとともに、縄文時代の遺跡を実際に発掘します。本物の遺物と遺跡で「考古学」を実体験するわけです。「演習」は研究法や論文の書き方を学ぶ場です。全員で論文を熟読し、要約と批評を繰り返すことで、考古学の方法論を訓練しています。４年生は卒業論文研究の中間発表をします。こうして４年間を過ごすうちに、学生さんたちは考古学専攻生としての意識と素養を身につけていきます。本に書かれたことを鵜呑みにする安直な姿勢ではなく、どうやって自分自身の論を組み立てるのかを真剣に考えている学生らしい姿をみるときが、いちばん嬉しいですね。「ずいぶん成長したな」と実感される瞬間です。

青木 敬（あおき たかし）

■ 歴史考古学
■ 古墳時代の考古学

考古学とは、人間が生活を営んできた長い年月の中で遺してきた物質的資料を研究対象とします。私は、日本列島の歴史のなかで文字資料が残されている時代、とくに古墳時代・飛鳥時代・奈良時代・平安時代の遺跡を中心に研究を進めています。

自らは言葉を一言も発しない土器や石器、建物の跡、古墳など、これらがいつ・どこで・誰が・何のためにつくったのか解きあかしていくのが考古学の魅力です。ただ、考古学を単なる謎解きで終わらせず、考古学からあきらかになった歴史を学ぶことが必要です。われわれが生きるこの社会が直面する問題を考えるための思考のひとつとして、歴史は大きな力になると思います。考古学を通して歴史を知り、歴史的思考を身につけていくこと、これが私のゼミにおける目標です。

ゼミでは日本列島の遺跡を学んでいきますが、古代の日本のありかたを考える上で避けて通れないのが、中国や朝鮮半島の歴史です。私は、みなさんとこれら東アジアの歴史も視野に入れた対話をするよう心がけています。

吉田 敏弘（よしだ としひろ）

■ 歴史地理学
■ 地図史

私のゼミでは、絵図・古地図の分析や伝統的景観の分析と保全の実践を中心に、学習している。特に景観保全では、岩手県一関市本寺地区の景観保全活動を支援し、この村内に今も残る小区画水田の復田と無農薬による米栽培に取り組み、ゼミ生有志が年に二度、田植えと収穫の体験で現地を訪問、地域住民との交流を実施している。さらにスキル教育として地理情報システムGISを導入し、学生にPC上での空間情報処理の基礎を指導して、さまざまな活用を図っている。

歴史地理学は、現代社会が抱える問題と向き合うことが重要だ。過去の地域の様相を復元し、過去から現代に至る地域の変化の実証的な解明を通じて、景観・環境保全や災害・防災といった現代の地域問題に貢献することができる。狭い教室に閉じこもることなく、国内や国外に足を向け、さまざまな地域に暮らす人々の姿をしっかりと目に焼き付けたい。私はそうした意欲と情熱をもった学生を歓迎する。学生時代にしか体験できないことを大切にしよう。

川名 禎（かわな ただし）

■ 歴史地理学
■ 近世都市空間の研究

私は、城下町に代表される日本の近世都市について研究しております。東京をはじめとして日本の主要な都市には、近世城下町を起源とするものが多くみられます。そのため城下町を知ることは現在の日本の都市を理解する上でもとても重要なことだといえます。日常的に目にする風景の中には、江戸時代から続く景観や、形を変えながら受け継がれてきた土地利用、そしてさまざまな都市機能が存在します。そうしたことに気がつくと、何気ないいつもの風景がたちまち興味深いものに変わるのです。

私が専攻する歴史地理学という学問

は、聞き馴染みのない方もあるかと思いますが、実は歴史の古い学問です。誰でも自分たちが暮らす土地や歴史の舞台について興味を持つものですが、そうした関心を持った歴史学者や地理学者によって学問としての体系化が図られました。歴史地理学は、現在では地理学の一分野に位置づけられておりますが、過去の地域や空間の復原やその性質の究明、変遷のメカニズムなどの解明を目指しております。分析にあたっては絵図や古文書、古記録をはじめ、現地の景観観察を重視する点に特徴がありますが、必要があればいかなる資料も貪欲に活用していきます。そのため史学科で様々な史資料について学ぶことができる本学は、歴史地理学を学ぶ者にとってはとても良い環境だといえます。

史学科で学んだスキルを生かしつつ、地理学的な問題関心について学ぶことで、皆さん自身の研究を築いていって貰いたいと思います。そうして現代の日本が抱える様々な社会問題、環境問題への取り組みについて考えながら、学問を通して社会と結びついていくことを目指して貰いたいです。歴史地理学に少しでも興味を感じた方は、是非一緒に学んでまいりましょう。

博物館学課程

内川 隆志（うちかわ たかし）

■ 博物館学

國學院大學大學には昭和３年に樋口清之博士によって創設された考古学標本室が起源となる國學院大學博物館があります。物質文化を研究する考古学を学ぶため多くの実物資料を直接見ることが出来る博物館の必要性を訴えての開館でした。それから80年、平成20年にリニューアルオープンし、20名に及ぶ専門スタッフによって特別展やワークショップの開催など日夜積極的な博物館活動を展開し、全国にその名が知られるようになりました。皆さんはそんな恵まれた環境で人文系学芸員としての博物館の専門的な知識と技術を習得できるのです。

博物館学は、人類が遠い過去から現在に至って築いてきた様々な生活文化の証を探求し、その成果から未来の新しい人間の生き様を学習するための殿堂である博物館を、より良き存在として科学的に達成するための学問として存在します。学芸員は博物館学の専門知識・技術、各々が身につけた専門分野における知識をフル活動させ、博物館という場で様々なかたちで社会に発信する専門職といえます。モノと人、人と人をつなぐ学芸員の世界を目指してみませんか。

山本 哲也（やまもと てつや）

■ 博物館学

博物館学という学問領域は、まだまだ一般の理解には至っていないのかもしれません。美術館の片隅に座っている監視員さんを学芸員と勘違いしている人も多いと言われます。博物館や学芸員の理解もままならない状態では、博物館学という学問自体の存在やその意義を知る由もないのかもしれません。しかし私は、博物館学こそ学生が社会に出るにあたって最も役に立つ学問ではないかと考えています。

そもそも博物館とは何でしょう？世の中にはさまざまなモノがあり、それを守る必要があります。では、それを何故守るのでしょう？それは、いろいろなモノというのは、我々が生きている証拠だと言えるからです。それを守っているのが博物館であり、そのモノを守るために従事するのが学芸員でであって専門性を発揮すべきなのです。もちろん、学芸員だけでいいわけではありません。市民のチカラが必要です。市民とともに社会全体で守る。それを学ぶことができるのも博物館学です。伝統ある國學院大學の博物館学のチカラ。それを感じてもらいたいと思っています。

教職課程

澤田 浩一（さわだ こういち）

■ 社会科教育
■ 公民科教育
■ 道徳教育史

中学校及び高等学校の教員を目指す皆さんが、教職に従事していくために必要とされる資質・能力を身につけるための科目を担当しています。皆さん自身が仲間と切磋琢磨しながら、実際に中学校特別の教科道徳、中学校社会科や高等学校公民科の授業を自ら構想し、学習指導案を作成することができるようになることを目指しています。

私は高等学校の地理歴史科及び公民科の教員として勤務した後、国立教育政策研究所において、中学校と高等学校の道徳教育並びに高等学校の公民科教育を中心に教育課程の調査研究に従事してきました。現在は、主に中学校道徳の教育内容や教材の変遷、中学校及び高等学校の社会科系諸科目の学習内容との関連についても調べています。

多和田 真理子（たわだ まりこ）

■ 社会科教育
■ 教育学
■ 日本教育史

私は主に、教員を目指すみなさんが修得する教職課程の科目を担当します。担当科目のひとつ「教育の原理」は、「あなたにとっての教育とはどういうものですか？」という問いかけから始まります。何かひとつの正解に行き着くわけではありません。究極の答えが見つからない問いの深みと、その深みを味わう楽しさを共有したいと思っています。

私が研究しているのは、日本の近代教育史です。学校や役場に残されている文書、昔の教育者たちが書いた記録などを読み解くのですが、知りたいのは、さまざまな時代を生きたそれぞれの人々にとって「教育」とはどのようなものであったか、何を学び、教えようとしたのか、教育を受けることで何が得られると期待したのか、ということです。私たち自身が経験し、またイメージしている「教育」とは、古今の数知れない人々が営んできた「教える」「学ぶ」の積み重ねで成り立っています。そう思うと、史料を読んで多様な教育観にふれることは、まさに「教育とは何か」という問いの深みを味わう楽しさそのもの、なのです。

國學院大學

〒150-8440　東京都渋谷区東4-10-28

発行:2024年3月25日

史学科へのお問い合わせ窓口
［文学部資料室］電話：03-5466-0246

実証主義。

歴史は史資料からしか語れない

表紙写真：鉄黒漆塗紺糸威異製最上胴具足 伝上杉景勝所用（新潟県立歴史博物館所蔵）
14頁写真：陸奥国骨寺絵図　鎌倉時代（東京大学史料編纂所所蔵模本）
裏表紙写真：火焔型土器　新潟県岩野原遺跡出土　縄文時代中期（國學院大學博物館所蔵）